

令和6年(2024年)9月27日

テーマ展「金のきらめき—^{かがや}輝きの日本美術—」を開催します

このたび、彦根城博物館において、みだしの展覧会を開催いたしますのでお知らせします。

記

1 展覧会名称

テーマ展「金のきらめき—^{かがや}輝きの日本美術—」

2 会 期

令和6年(2024年)10月2日(水)～令和6年(2024年)11月4日(月・休)

開館時間：午前8時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

3 会 場

彦根城博物館 展示室 1

4 展示の趣旨

金は、洋の東西そして時代を問わず人々を魅了し続けてきました。その美しさと希少性ゆえに珍重されるとともに、豪華な雰囲気と、時を経ても失われることのない輝きから、富や権力、聖性や永遠を表すものと考えられてきました。

日本においても、古来、金は聖性の象徴とされてきました。それが最も端的に表れているのが仏教美術です。仏を表す際には金箔や金泥を多用してその姿を^{しょうごん}荘厳し、^{まつ}仏を祀る空間も金銅製の仏具などで飾られました。加えて、曼荼羅や経典といった、信仰に関わるさまざまな品にも金が使用されています。

金の輝きを太陽の光、銀の輝きを月の光ととらえ、金と銀を用いて日月を表すことも、古くから行われてきました。日月は陰と陽を象徴し、超越的な力を持つと考えられてきたモチーフです。表裏に日月を配した^{ぐんせん}軍扇や日月を備えた武具などは、これらを持つことで日月の力を身に運びようとしたものと考えられます。

さらに、金の輝きは、めでたさや非日常性を象徴するものでもありました。金地の屏風や障壁画の金は、聖性、吉祥性、非日常性あるいは富や権力などの多様な金のイメージが投影されたものであるといえるでしょう。

一方、素材としての金は、展延性（薄く広げたり、細長く引き延ばしたりすることができる性質）に優れ、他の金属に比べて低い温度で熔解するため、加工が容易である点の特徴です。日本では、この特性を活かして作られた金箔や金粉が、工芸の素材として多様な展開を遂げました。漆の地に金粉をまいて図様を描き出す蒔絵は、漆工品に輝きを与え、金糸は布に織り込まれて豪華さを演出し、金泥で文様を表す金彩は陶磁器を華やかに彩っています。

本展では、金の輝きをまとったさまざまな収蔵品を通して、単なる装飾にとどまらない金の役割や、その多彩な表現を紹介します。

5 展示作品

別添リストの29件

6 観覧料

一般 700円(560円)

小・中学生 350円(280円) ()内は30名以上の団体割引料金

*常設展「“ほんもの”との出会い」も併せてご覧いただけます。

7 関連事業

(1) 関連講座「金の輝きと聖性」

日時：令和6年(2024年)10月12日(土) 午後2時～ *90分程度

会場：彦根城博物館 講堂

定員：50名(当日先着順、午後1時30分から受付)

資料代：100円(彦根市内の小学生以下は無料)

講師：茨木恵美(当館学芸員)

(2) ギャラリートーク

日時：令和6年(2024年)10月5日(土) 午後2時～ *30分程度

会場：彦根城博物館 展示室1

講師：茨木恵美(当館学芸員)

その他：観覧料が必要

問い合わせ先

彦根市教育委員会事務局

彦根城博物館 学芸史料課

担当：茨木恵美

(電話 0749-22-6100)

テーマ展「金のきらめき—輝きの日本美術—」展示作品リスト

指定	番号	名称	作者	数量	時代	所蔵
聖なる輝き						
	1	続日本紀	藤原繼縄他 撰	20冊の内 1冊	成立：延暦16年(797) 刊行：江戸時代	当館（井伊家伝来典籍）
市指定	2	浄土変相図（当麻曼荼羅）		1幅	鎌倉時代	唯称寺
市指定	3	阿弥陀三尊来迎図		3幅	鎌倉時代	高宮寺
	4	紺紙金泥妙法蓮華經	緑樹院知秀 筆	8帖	江戸時代中期	清凉寺
	5	金銅蓮華文透華鬘		4枚の内 1枚	江戸時代 元禄9年(1696)	当館（井伊家伝来資料）
	6	能小道具 金銅宝相華唐草文透天冠		1頭	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
	7	日月文軍扇		1握	江戸時代中期	当館（井伊家伝来資料）
市指定	8	鉄地六十二間小星兜		1頭	江戸時代	当館（井伊家伝来資料）
	9	笙 銘春月		1管	江戸時代	当館（井伊家伝来資料）
	10	八仙祝寿図	狩野永納 筆	6曲1双 の内1隻	江戸時代前期	当館（小倉美津子氏寄贈資料）
	11	四季遊図		2巻の内 1巻	江戸時代	当館（井伊家伝来資料）
	12	能装束 金地团扇形と桐と七宝散らし文様唐織		1領	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
	13	能装束 浅葱地斜格子に桐菊文様金欄袷法被		1領	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
	14	能装束 白地鱗文様摺箔		1領	大正～昭和初期	当館（井伊家伝来資料）
	15	能面 獅子口	甫閑満猶 作	1面	江戸時代 享保10年(1725)	当館（井伊家伝来資料）
輝きをまとう—多様な金の表現—						
	16	黒鯛色塗鞘大小拵・小さ刀拵		1腰	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
	17	黒漆塗橘紋金蒔絵膳椀		1式	江戸時代 文久2年(1862)	当館（井伊家伝来資料）
	18	金梨地牡丹唐草能道具文蒔絵鞍・鐙		1式	江戸時代	当館（井伊家伝来資料）
	19	金沃懸地花車蒔絵硯箱		1合	江戸時代中期～後期	当館（井伊家伝来資料）
	20	伊万里焼 錦手花鳥図大皿		1枚	江戸時代中期	個人
	21	湖東焼 赤絵金彩麒麟文酒盃	赤水 作	1口	江戸時代後期	個人
	22	湖東焼 赤絵金彩紗綾形文燭台	鳴鳳 作	1基	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
	23	朱漆塗橘桐紋金蒔絵鞘脇指拵		1腰	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
	24	磯草白檀塗鞘大小拵		1腰	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
	25	色絵一ノ谷合戦図三所物	後藤光昌 作	1具	江戸時代前期	当館（井伊家伝来資料）
	26	色絵武者合戦図大小鐺	喜多川宗典 作	2枚	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
	27	梨地金象嵌松帆に千鳥図鐺	大森英秀 作	1枚	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
	28	朱地井の字金箔押旗印		1流	江戸時代	当館（井伊家伝来資料）
【参考】江戸時代の金と工芸						
	29	黒漆塗蒔絵手板 附：青金		1式	江戸時代	当館（井伊家伝来資料）

写真解説

1 阿弥陀三尊来迎図 3幅 (作品リストNO. 3)

彦根市指定文化財

中幅 (阿弥陀如来) : 縦 112.2cm 横 39.3cm 右幅 (観音菩薩) : 縦 107.8cm 横 35.7cm

左幅 (勢至菩薩) : 縦 100.8cm 横 35.9cm

鎌倉時代

高宮寺蔵

阿弥陀如来とその脇侍である観音・勢至菩薩が、往生を遂げようとする人の元に、極楽浄土から雲に乗って現れる様を描いています。

仏は32の優れた身体的特徴を持つとされますが、この内、仏の聖性を端的に表す特徴として最も重視されたのが、全身が光輝くという金色相です。これを表現するため、古来、仏の姿を表す際には金が多用されてきました。本図においても、三尊の身体は金泥で塗られ、衣には截金（ごく細く切った金箔で文様をあらわす技法）で精緻な文様が施されています。本図をはじめとする仏教美術における金は、金が聖性の象徴とされてきたことを端的に示しています。



2 日月文軍扇 1握 (作品リストNO. 7)

縦 37.0cm 横 60.5cm

江戸時代後期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

表面には金地に朱色の丸で日（太陽）を、裏面には朱地に銀の丸で月を表した軍扇。親骨には、九つの星を図案化した九曜星と北斗七星が表されています。軍扇は武将が自軍を指揮するために用いた扇で、本作は井伊家10代直幸の所用とされる具足に附属して伝来しました。

古来、太陽と月は昼と夜、陰と陽を象徴し、超越的な力を持つと考えられてきました。日月を金銀で表す伝統は古く、日本においても古墳の室内装飾、神仏に関わる工芸品のほか屏風、武具などにも見られます。中でも日月を配した武具は、それを着用することで日月の特別な力を帯びようとしたものと考えられ、本作は災いを退けるとされる九曜星、敵を打ち破る星とされる北斗七星とともに表すことで、さらにこれらの力も得ようとしたものとみられます。



表面



裏面

3 ^{はっせんしゆくじゆず}八仙祝寿図 ^{かのうえいのう}狩野永納 筆 6曲1双の内1隻 (作品リストNO.10)

縦 174.0cm 横 64.5cm

江戸時代前期

当館蔵 (小倉美津子氏寄贈資料)

金箔を貼り詰めた金地を背景に、寿命を司り、長寿を授けるとされる^{じゅうろうじん}寿老人が、有名な8人の仙人(八仙)に歓迎されている様子を描く屏風。仙人は不老長寿の術を修め、人間には計り知れない靈妙自在の神通力を得た者と考えられており、吉祥画題としても愛好されました。

光輝く金は富や権力の象徴であるだけでなく、聖性を表現し、めでたさや非日常性といったイメージを喚起させるものでもありました。本作においても金雲と一体化した金地の背景は、画面内に無限の奥行きをもたらすとともに、仙人が集うこの空間が現実とは異なる聖なる空間であることを強調し、画題のめでたさをより一層高めています。



4 ^{のうしょうぞく}能装束 ^{きんじうちわがた}金地団扇形と桐と七宝散らし文様唐織 ^{きりしつぽうち} 1領 (作品リストNO.12)

丈 135.7cm 衿 74.8cm

江戸時代後期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

装束全体に、^{きんし}金糸 (和紙に金箔を貼り、細く切って糸状にしたもの) を織り込んだ^{からおり}唐織。金地の上にさまざまな色糸で、牡丹と椿の花を納めた団扇形、桐、七宝文を散らした重厚な一領です。唐織は、能装束を代表する華麗な装束で、主に女性の役で使用します。

この世ならざる存在である神や霊を主役とする能において、装束は単なる豪華な舞台衣裳というだけでなく、役柄の性質や心情を表現するとともに、役者が人ではない存在になるための重要な道具の一つです。特に、金糸で文様を織り表した^{きんらん}金欄や本作のような金地の唐織といった、金を多用した装束は、神や鬼神あるいは特に高位の女性の霊の役に用いられ、その靈性の高さや品格、威厳を象徴します。



5 ^{きんなしじ ぼたんからくさのうどう ぐもんまきえくら あぶみ} 金梨地牡丹唐草能道具文蒔絵鞍・鏡 1式 (作品リストNO.18)

鞍：前輪高 21.2cm 後輪高 26.0cm 居木長 30.2cm

鏡：高 25.5cm 長 29.1cm

江戸時代

当館蔵 (井伊家伝来資料)

金梨地に、牡丹唐草文を背景として、^{たかまきえ}高蒔絵で能道具を表した豪華な^{くらあぶみ}鞍と鏡。

蒔絵は、漆で文様を描き、そこに金や銀の粉などを蒔きつけて文様を表す、漆工芸の技法の一つです。使用する金属の種類や蒔く粒の形や大きさ、粗密の程度、あるいは色漆などの併用によってさまざまな変化をつけることが可能なため、じつに多彩な展開を遂げました。本作も、

金のほかにやや青みがかった色の金、銀、色漆を使って^{つづみ}鼓や^{ちゅうけい}中啓などの文様までも細やかに描き込み、また、高蒔絵に細かな凹凸をつけて^{えぼし}烏帽子の^{しわ}皺の質感も表すなど、さまざまな技法が駆使されています。

